論　文　要　旨

学位論文題目　「上田秋成研究」

氏　　名　　近衞　典子

本論文は江戸時代の上方の作家、上田秋成について考察した研究である。かつて、上田秋成を研究する際には、秋成の代表作である『雨月物語』『春雨物語』を中心として論じていくのが常套であった。しかしながら、秋成の全集が刊行されて以来、そのかつての一般論で秋成を論じることの限界が露呈してきている。　秋成の作品は『雨月物語』『春雨物語』にとどまらず、浮世草子などの小説、国学研究とその傍らに生み出された戯作、和歌・和文、狂歌・俳諧、随筆など多岐にわたっている。当然ながら、それらの作品群すべてを視野に収めた秋成研究が待たれている。

本論文は序論と第一部から第三部、及び「終わりに」の五段構成となっている。第一部「秋成の物語の再検討―古典の受容と当代性と―」においては、副題に示した通り、過去の古典作品との関係、及び秋成の生きた時代との関わり、という二つの視点を以て物語作品を論じる。秋成作品と古典との関わり、その享受のあり方については、複数の秋成作品における『源氏物語』受容の方法の変遷や、浮世草子作品と秋成の古典研究との関わりなど、従来は扱われなかった作品と古典との関係についての新知見を重視しながら構成した。一方、当代の流行や宗教、思想界を踏まえた作品理解の可能性と必要性という観点から、明和期に流行した鎮宅霊符信仰を踏まえた『雨月物語』「吉備津の釜」の新たな読みの可能性とその作品論を示した。ここでは、従来の研究史については個々の論考の中で問題意識の所在として紹介し、その肥沃な恩恵を受け継ぎつつ、本論文の目標とする新たな秋成研究への導入ともなるべきことを目指している。

第二部「『癇癖談』と大坂騒壇」では、視点を全く異にしている。宝暦・明和（1751～1772）という特定の一時期に、大坂という限られた地で馬鹿馬鹿しくも可笑しい特筆すべき独特の文化が育まれ、その中に数多くの文藝が生み出されていったという、大坂文藝に対する一つの捉え方が中村幸彦により提唱され、「大坂騒壇」と名付けられた。秋成はまさにその時期の大坂に成長し、作家活動を開始したのである。この大坂騒壇に身を置き、仲間とともに愚にも付かぬ遊びに戯れ笑いさざめく一方で、古典に親しみ国学研究に打ち込み、そのあわいに生み出される戯作を楽しんでいた。従来は看過されがちであったが、その環境でこそ生み出すことを為し得た作品群が秋成にはある。そして本論文では、それが秋成文学の支柱たり得ることをまずは強く指摘している。『伊勢物語』研究と『癇癖談（くせものがたり／かんぺきだん）』執筆、『万葉集』研究と『万匂集（まにおうしゅう）』出版などはその具体例である。

第三部「秋成の和歌と和文と」は、秋成が後年、還暦を機に京都に移住してからは大坂とは異なる趣を持つ雅文壇との交流を持つことに注目したものである。江戸時代には国学の発展に伴い中国への文化的追随を再考しようという意識が生まれ、新たなる「文」の模索が始まっていた。伴蒿蹊によって「漢

文」に対しての「和文」が提唱され、秋成もその実作に励んだ。また和歌の世界でも、伝統と権威を誇るものの形式主義に陥り芸術としての価値を失っていた堂上和歌に対し、和歌は日々の生活の中に湧き上がる素直な思いを日常の言葉で詠むべきだという「ただこと歌」の理論が小沢蘆庵によって唱えられ、この主張に共鳴した秋成は自在な和歌の詠みぶりによってこれに応えている。このような状況を背景に、従来は等閑視されていた秋成の江戸歌壇に対する関心について新資料を提示しつつ考察し、また具体的な秋成の和歌作品や和文作品についての分析を行った。

以上、秋成の文藝活動は単に物語に収束するものではなく、物語、国学研究、古典を踏まえたパロディ、和歌・和文、俳諧、狂歌など、広がりを持つ秋成作品を全円的に研究することによって初めて浮かび上がってくる世界があることを、この三部による構成で明らかにした。これを踏まえ、最終章では「終わりに―秋成文藝の当代性―」と題して、秋成の文藝が常に読者を含めた現実世界との交渉を念頭において執筆されているという特質を明らかにし、今後の研究への展望を示した。

本論文は、叙上の如く上田秋成の多方面に亘る作品を対象とし、豊饒な地平を切り拓くことを目的とする。そして、単なる作品論に終始するのではなく、作家の動向、時代性、環境までを視野に収めた包括的な研究を目指したものである。